



思考の飽和点

私は、この「Sense of Mission」や「校長研修だより」「校長講話」の3つを発信しています（すべて学校 HP で見ることができます）。なかなかみなさんと日常的にお話しできないこともあって、私はこの紙面を借りて、みなさんと話をしているつもりになっているのです。一方通行で、すべて伝わっているとはもちろん思っていません。自己満足かもしれませんが、密かに思うだけではダメだと思うので、書く作業で、「行動をすることで知を力に変える」ことを実践しているつもりです。

このおたよりで何を書くかというアイデアは、「考えているとき」でなく「書いている最中」に浮かびます。実は、この「考えるより行動の法則」は、人が行うあらゆる領域の活動に当てはまるのではないかと思います。

例えば・・・私は47歳のとき1年間、民間の会社の経営研修で、営業職を経験しました。完璧なセールストークができるようになったのは、相手を目の前にしてのセールストークを数えきれないほど経験したからです。

ある製品が市場に受け入れられるのかどうか分かるのは、市場調査によってではなく、製品を市場に出してみたらです。

音楽家は楽器の演奏方法を頭で考えるのではなく、実際に演奏しながらその楽器の名手になっていきます。みなさんも単に教科書を読むことによってではなく、日々いろんな人と関わりながらいろんな能力を育んでいきます。

それはどうしてだと思いますか？

なぜなら先のことなどわからないからです。先行きを完全に予測できる人なんていないからです。もしかしたら、少し先ことはわかる時があるかもしれませんが、でも、その境界線の先を見なければ、その場にとどまるのでなく、行動を起こさなければならないのです。

私の教師生活での学級だより第1号のタイトルは「一流の批評家でなく、三流の実践家であれ！」でした。学級だよりなので、生徒に向けてえらそうに書いたと思うのですが、自分に対しての言い訳的なことだったとも思います。「今の俺にはこれしかないよな。失敗することも多いだろうし」という内心でした。あれから35年・・・そのマインドは今も何も変わりません（笑）。だから法則なんだろうと思います。

みなさんの中には、すごく考え、思い悩む人がいると思います。考えることはいいことですが、その後そこでストップしてしまうことがあります。おそらくその人の思考は、これ以上長く思い悩んでも1ミリも先に進まないポイントに達しているのです。これを「思考の飽和点」と言います。この状態を長く続けると、行動が消極的になって、新たに得られる気づきはどんどん小さくなっていきます。

私は、頭の中で考えることは、懐中電灯で照らす範囲と思うようにしています。行動を起こせばサーチライトであたりを照らし出したかのように、一気にいろんなものが見えるようになると思っています。強い光は、ずっと先まで行き届きます。

なのに、なぜ考えすぎるのでしょうか？

それは、考える方が楽で、行動する方が難しいからだだと思います。その理由ははっきりしています。考えるだけならリスクはゼロで、行動すれば失敗や挫折のリスクはゼロではないからです。ですが、行動を起こせば、その代わりに経験を手に入れることができるのです。

「望んでいたものを手に入れられなかった場合に、手に入れられるのは経験である」

みんなには、「成功」より「成長」してほしい！！